

■書 評

臨床と哲学のあいだ：
木村敏とドイツの現象学・人間学木村敏記念臨床哲学文庫＋日独文化研究所 監修
清水 謙信 編

(見洋書房、2026年、3,400円＋税)

(評者) 林 直樹 (西ヶ原病院)

本書は、木村敏の蔵書や関連文献を収めた「あいだ」の図書室が名古屋市の八事病院に開設されたことを記念して刊行されたものである。第Ⅰ部と第Ⅳ部では、所蔵資料の概要と共に、その開設に至る経緯や、膨大な資料群を丹念に整理していく作業の一端が紹介されている。この事績の重要性にふさわしい重厚な記述である。

さらに本書の特筆すべき点は、それが木村の思想とその展開過程を振り返るだけでなく、さまざまな立場からのそれに対する討論の場となっていることである。とりわけ第Ⅱ部には、宗教学、哲学、人間学、精神病理学の熟達した論者が、木村の提起した問題に正面から取り組んだ成果が集められている。宗教学の立場から大橋良介は、アンテ・フェストウム、ポスト・フェストウム、イントラ・フェストウムの時間体験の三様態（契機）が構想された経緯とその後の木村自身の考察を振り返るとともに、別の立脚点からの捉え方が提示され、さらに宗教哲学と精神医学の接点を広げることが提案されている。哲学者の谷徹は、「私」体験の現場に迫ることを志しつつ、デカルト R、カント I、フッサール E を参照しながら、哲学と木村の自己論・出会い論の接続点を探ろうとしている。医学的・人間学の立場から丸橋裕は、その木村の思想への影響を系統的に辿り、その中でヴァイツゼッカー V の「死の連帯性」論への木村の「その概念が（しばしば複数形で使われているなどのことから）個別の死を扱うものに留まっている」とする批判に対して反論を加えている。曰く、死の連帯とは、ヴァイツゼッカーの戦

場における体験から導かれた概念であり、命ある者を食するという食物連鎖（宿命）の下で生きる人間のあり方にも通じるというのである。精神病理学の清水謙信は、ブランケンブルク W と木村の「自明性の喪失」をめぐる見解の相違、すなわち「自然（おのずから）」と「自己（みずから）」の関わり方がブランケンブルクは前者を素朴なものとし、後者を重視しない（両者が弁証法的関係にある）のに対して、木村は両者に根源的自発性という共通根があると主張するという相違について、それが（時間体験の三様態などから見た）「自由」観の相違に由来するものであることを論じている。これらの議論は、それぞれが実質的に木村の論考に厚みを与えようとするものである。

本書のよく整理された記述からは、木村が自身の学を臨床哲学と名付けるに至った思索の流れを読み取ることができる。そこでは、木村がハイデッガー M、西田幾多郎、ブランケンブルク、ヴァイツゼッカー、テレンバッハ H との出会いから展開の契機を見出していること、そして時期ごとに生じた問題意識に基づいて、ノエシス・ノエマ論などの自己論や「あいだ」論、ゾーエー／ビオス論などの大胆な布石を打っていったことが確認できる。木村はよく考え抜いた上で議論を進めているのであるが、時代の推移の中で、彼自身によってその理解が徐々に深められていくという展開も見えて取ることができる。同時にそこでは、共同研究者や後継者たちがそれぞれに（木村の打った布石を基として）議論を広げていくという過程も明らかである。そこには、臨床哲学の深みと発展性を確認することができる。

本書では、第Ⅲ部「エッセー」を中心とする多彩な記述を通じて、木村敏という一人の人間のあり方、そしてその息遣いまでもが伝えられている点もまた重要である。関わりの深い人々の文章を読み進めるうちに、読者は、まさに木村敏とその人が向き合っている現場に立ち会っているかのような感覚を覚えるだろう。そこには、これまで木村敏が多くの人々と結んできた関わりの全体が、一望のもとに立ち現れてくるような趣がある。

最後に、本書が臨床哲学の発展と現在を理解するためのもっとも重要な文献の一つであることを改めて強調しておきたい。